

## 10. わかっていることにどう対応するのか

自然災害に限らず対策をするためには、まずは予測できないことが起きるとしてもそれなりの理由があるということを知ることが大切です。つまり、発生した事象について背景を解明することなく、目先のことで対応してもうまくいきません。したがって、手順としては、発生のメカニズムを不完全ながらも十分に詰めておいて、これまでの経験や実績等を比較検討してより安全で機能を満足し、ライフサイクルコストや環境から見て適切なものを構想するということになります。さて、自然災害は突発に来ることが多いのですが、どのようなところが危険なのかについては事前にある程度知ることができます。しかし、自然災害といっても、地震津波、火山、豪雨災害、土砂災害と多岐に渡っていて、被害範囲や規模は定式化されているわけではありません。したがって、災害が発生したときには、現状を即座に分析して評価して、情報を伝達することが必須となります。そのためにも情報収集に全力を挙げて、優先度、投資効果、実施の可能性、対象者などへの伝達などがスムーズに実行され、かつ進捗中に修正や改善をいとわないだけの勇気も必要になります。もちろん、人命第一で、被害者も救助者も犠牲になることは避けなければならないし、二次災害についての状況判断は大変責任の大きいものになります。災害となれば、まずは救助、避難、復旧という作業が連続して行われますが、同時に避難先と避難解除についても目配りができるマルチ的な判断が必要となります。

災害は来ることはわかってはいても、突然、突発なことで狼狽し、どう対応すればよいのか一瞬茫然とするものです。当然、発生したことに対しての現状の回復に行動を起こすこととなりますが、事前から訓練されていたとしても、その通りにはいきませんので、ここで力を発揮するのは、それまでの経験や知識の応用力になります。ところで、大きな自然災害であればあるほど、一過性では終わりません。物は復旧できたとしても、心的なダメージはその後も継続して悩ませることになります。よく、余所から復旧後の風景を見て復興できたということを言われますが、決して復興など簡単には終わらないと思います。むしろ、被害者は復興という言葉に違和感を覚えると思います。そして、災害には、二次災害というか副次的な災害が発生することが多いのです。時には、後続連鎖災害のほうが大きなダメージになることさえありますが、これも自然災害の恐ろしさであると思います。例えば、地震であれば余震や余効地震、液状化による地盤の沈下・陥没、盛土崩壊が発生しますし、巨大地震では数十年にわたって他地域の地震活動を活発化させたり、火山活動を誘起させたりもします。豪雨災害であれば、浸水氾濫の後での地すべりやがけ崩れ、土石流といった土砂災害が発生してくることもあります。自然災害で最も重要な対応は、避難することですが、これも避難場所、経路、避難箇所、避難方法が適切でないと不都合な

ことが生じます。と同時に避難解除やその伝達方法など多くのことに配慮しなければなりません。そのためには、情報とリスクの特定には課題が多く、機会あるごとに修正、改善していくことが求められています。そのために、まずは地域の災害リスクをハザードマップ等で確認することが必要となります。そして、学校教育を通じての自然現象、自然災害に関する知識が提供される必要があります。最近、よびかけると瞬時に答えてくれるスマートフォンがありますが、大事なことは単なる物知りではない課題解決、応用する力です。自然災害は、来るものが来るだけのことですが、いつ来るのかがわからないが故の対応こそが防災であるということになります。おきてから、聞いていないとか経験していないとか、想定外を言ったところで始まらないということを肝に銘じておきたいものです。